

このように、「かしもの・かりもの」の理は、「身の内御話と八つのほこり」の教理とセットで理解すべきものである。より適切に言えば、この教理が「かしもの・かりもの」の理の土台であるということである。この「身の内御話と八つのほこり」の教理理解によって、原典における論しがより明確なものとなる。「かしもの・かりもの」の教理を、単に人間とその身体に關するものとみなす向きもあるが、そこには、神の守護や世界の治まり、そして、心の治め方についての根本的な洞察が含まれているのである。

「かしもの・かりもの」の理解を通してみてきたように、きわめて根本的な事柄が、当然の事柄として原典のことばにおいては隠されている。この隠れた土台を浮かび上がらせることによって、天理教の教えを深みと広がりをもって理解することができるのである。

戦後台湾における生長の家の受容層の変遷

寺田喜朗

本報告は、戦後台湾における生長の家の展開と受容層の変遷を明らかにすることを目的とする。台湾における生長の家の展開は、董芳苑・瞿海源・藤井健志等の研究で触れられているが、断片的な記述に留まっている。筆者は、一九九六年から断続的に調査研究を進めているが、その成果をまとめた『旧植民

地における日系新宗教の受容』（二〇〇九年二月）と、本年八月に行った補充調査に基づいて本稿の論述を進めていく。

生長の家は、戦後、日系新宗教の中では最も早い時期に布教を再開したが、創価学会（約十萬）・天理教（約三萬）・真如苑（約二萬）・佛所護念会教団（約一萬二千）等と比べた時、教勢は伸び悩んでいる。また文書伝道を核とすることからメンバーの流動性が高い。現在、六五一〇部の機関誌を発行し、聖使命会員は四二八四人、地方講師は一七四人である（二〇〇九年六月現在）。聖使命会員の中には名目上の信者も含まれ、地方講師資格者の中にも休眠状態にある者が散見される。以下では、主体的な信仰を保持し、アクティヴな運動の担い手として活動するリーダー層を中心に論を進める。

戦前、生長の家の信者はほぼ在留邦人で占められていた。若干名の台湾人信徒が存在したが、彼らは高い学歴／日本語リテラシーを有する日本教育エリートであった。誌友会は戦時下、休止していたが、戦後、邦人引揚げによって全滅する。一九五五年に戦前からの信奉者である王承通（一九一〇—一九八八）が独力で布教活動を開始し、彼を基点に信者ネットワークが形成される。戒厳令下、地下活動として維持された誌友会の参加者は、日本語リテラシーを有する高学歴層に限定されていた。王らは、一九六八年に韻文の雑誌を発刊する。これは日本語リテラシーの低い戦前世代の低学歴層への布教を企図して編まれ、発行部数は二千であった。一九七八年、戦後世代の日本語リテラシーをもたない層を対象にした白話文の雑誌が発刊され、最大で五千部発行する。一九八四年には、研究団体「生命

第10部会

「實相研究會」として社団法人格を取得し、非宗教団体ではあるが運動は合法化された。成立大会には三百人が集まった。誌友会は、この時期以降急増する。同年、地方講師が二人誕生しているが、彼らは全て日本語リテラシーを有する高学歴層であった。一九八五年に機関誌は『生長之家』誌(白話文)に一本化される(当初の発行部数は二千部)。一方、八〇年代以降、千華・商鼎文化という教団とは無関係の出版社が、海賊出版で翻訳書を公刊し始める。一九九二年に宗教団体「生長之家傳道協會」として認可を受け、現在の組織体制が確立し、公領域における布教が解禁される。また、日本人の教化総長が赴任し、日本本部からの梃子入れが本格化する。九〇年代後半には地方講師が約一五〇人増産され、聖使命会員は当初の約一四〇〇人から漸増を続けている。しかし、この間、リーダー層の世代交代が進み、十分な日本語リテラシーをもたない低学歴の地方講師が有資格者の約九割を占めるに至る。彼らは、十分な翻訳・通訳作業を遂行することができず、休眠状態に陥る人々も発生する。また、相対的に社会関係資本が脆弱で、御利益信仰が強く、手段的なコミットメントに留まる傾向がある。台湾生長の家は、九〇年代以降、日本語リテラシーを有する層↓もたない層、高学歴層↓低学歴層への受容層のシフトが急速に進んでおり、同時期に急成長を遂げた日系新宗教と比較した際、教勢拡大が鈍化している現状が見られる。以上の受容層の変遷には、台湾社会全般における日本語リテラシーの低下という構造的要因と並んで、日本本部の北京語化志向への古参エリート層の不適応、台湾人の間における対日観の世代間ギャップと連動した

宗教的ニーズの複層性、当地特有の「私塾―学友型」の活動形態に惹起された放任的な育成システム等といった要因が介在している。

教団変革期における体験談の変容

——世界救世教を事例として——

武井 順介

新宗教において信者の奇跡体験(体験談)やそれを他者に伝達する「体験談発表」は、信者の信仰の強化に重要な役割を果たす。この体験談や体験談発表には、報告する体験談をまとめる過程において、自らの信仰を強化し、体験談発表を聞く(見る)信者は、他者の体験談に共感し、その体験談を通して自らの体験を構築する、という役割がある。

本報告の事例である世界救世教いづのめ教団(以下救世教)でも同様に体験談(体験談発表)は重要な意味を持っているようにみえる。例えば、各浄霊センターや聖地(静岡県熱海市)での勉強会や大祭などで体験談発表が行なわれ、それらにもとづき浄霊センター長や理事長、そして教主が信仰の重要性について体験談を解釈するなかで主張する。またこの主張のなかには、そのときの教団の教化・布教戦略が織り込まれることが多い。そこで本報告では、変革期の救世教の体験談を分析し、変革期の教化・布教戦略や体験談の特徴を捉えたい。